

ところ』と共に、マリー・ホール・エッツの『もりのなかへ』をとりあげた。同じくエッツの代表作である『わたしとあそんで』(図2)は女の子が主人公なので、簡単に触れておこう。主人公の女の子は、おつかいに行くのではなく、野原(＝女の子にとっては森)へ遊びに出かける。虫や亀などの小さな生き物と遊ぼうとするが、みんな逃げていってしまう。だがじっとしていると、生きものたちはみんな戻ってきて、女の子は至福のときを過ごす。じっと待つて野原と一体化することで、そこに住む生き物に受け入れてもらおうというのは、真実味があるし、これも魅力のある冒険に違いない。だが「待つ」ことは受動的で、女性性が強い。女性の歴史においては、長いこと「待つ」(ふさわしい男性を待ち、子どもが生まれるのを待つ)以外に運命を切り開くことができなかったことを思うと、女性にとっては胸苦しいところのある絵本ではないだろうか。母親はまったく登場しないにもかかわらず、少女の身なり(後ろで結ぶエプロンをかけ、髪型は複雑に編み込まれている)からも、空で見守っている太陽からも、母親の存在が強く想起される。『もりの



(図2 『わたしとあそんで』マリー・ホール・エッツ作、与田準一訳、福音館書店、1968年)

なか』の少年が自ら身なりを調べて(紙の帽子をかぶり、ラッパを持って)旅だったことと比べると、女の子が家庭の保護の元にいることが思われる。

ぬいぐるみは♂

さて今回は、女の子が「小さい母」となる冒険をもう少し追求するために、ぬいぐるみとの情愛を描いた二冊の傑作絵本『こんとあき』と『くまのコールテンくん』を見てみよう。二冊に共通しているのは、人間の女の子♀とぬいぐるみの男子♂(「こん」はキッネ♂で、「コールテンくん」はくま♂)という組み合わせであることだ。

いっぽう人間の男の子♂とぬいぐるみを描いた絵本ではぬいぐるみも♂であることが多い(たとえば『くまのビーディーくん』(注2)『ふわふわくんとアルフレッド』(注3)『ぼくのワンちゃん』(注4)など)。♂対♂であるために、やがて男の子同士の友情物語に発展していきそうな芽を持っている。つまり男児とぬいぐるみの関係には横の関係、友情に近いものがある。これに対して女の子が主人公の場合は、ぬいぐるみは♂と異性であることが多く、♀対♂となるために友情というよりは、保護者と被保護者という縦のつながりに近いものが現れやすい。保護者と被保護者の立場は物語の途中で入れ替わることもあるが、女の子はぬいぐるみの「小さい母」になることが多いのだ。